

論 説

ムラービト朝における
バイアの変遷と統治の正当化

野 口 舞 子

は じ め に

サハラ砂漠西部のサンハージャ系ベルベルの宗教運動（ムラービト運動）を母体として成立したムラービト朝（1061年頃-1147年）によって、マグリブ・アンダルスの両地域は、初めて一つの王朝によって統治され、マーリク派法学が統一的に採用されるなど、大きな転換期を迎えた⁽¹⁾。加えて、マグリブ・アンダルス両地域の人びとにとって、王朝の核をなしたサンハージャ系ベルベルは、実質的には外来者であった。彼らがこの広大な領域と多様な住民を統治する際、バイア（bay'a, 忠誠の誓い）が、王朝権力の伸張の諸局面で重要な役割を果たしていた。

一般に、バイアは、個人または一団の人びとがある人の権威を認め、服従の意思を示す契約行為とされ、これを通じて、支配者は自身の政治権力の正当性や権威を示した。その手続きは、通常大きく二つの儀礼に分かれ、王族、廷臣、軍事指導者などの王朝の中心人物が行う「貴顕のバイア（bay'at al-khāṣṣa）」と、その後、一般民衆が忠誠を示す「民衆のバイア（bay'at al-'amma）」からなる。これらの後に、各地の総督や軍司令官からバイアを得るため、使者が派遣された⁽²⁾。

マグリブ・アンダルスでは、イドリース朝（789-926年）や後ウマイヤ朝（756-1031年）からバイアは行われてきたが、ムラービト朝ではそれまでの時代に比べ史料中の記述が増える⁽³⁾。本稿では、ムラービト朝期のバイアを、契機（タイミング）、参加者、手続きなどについて、時代や地域による変化から、王朝の権力構造や支配領

域との関わりを検討するとともに、王朝の統治理念を考える手がかりとしたい⁽⁴⁾。

史料は主に年代記、伝記集、書簡を用いた。そのうち、年代記史料に関しては、ムラービト朝と同時代に著されたものの殆どは失われているため、後代、特にマリーン朝期（1269-1465年）に著されたものを使用した。これらは散逸したムラービト朝期の史料を引用しているため、当時の状況を反映していると考えられるとともに、後代の年代記作者の見解を検討することも可能である。なかでも、イブン・イザーリー Ibn ‘Idhārī（1312年以降没）の *Bayān* や、作者不明（1381年執筆終了）の *Hulal* などは、イブン・アッサイラフィー Ibn al-Ṣayrafī（1162または1174/75年没）やワッラーク al-Warrāq（1160年以降没）らの同時代の史料を引用しており、重要性が高い⁽⁵⁾。なお、本稿では、現在のアルジェリア西部からモロッコに相当する地域をマグリブと呼ぶ。

1 王朝草創期・征服期のバイア

1-1. 宗教指導者イブン・ヤースィーンとベルベル諸部族の関係

ムラービト朝の母体であるムラービト運動は、サハラ砂漠西部の大西洋沿岸を拠点としていたサンハージャ系グダーラ族（ジュッダーラ族）のヤフヤー・ブン・イブラーヒーム Yaḥyā b. Ibrāhīm（1048年頃没）がメッカ巡礼を行った後、法学者イブン・ヤースィーン ‘Abd Allāh b. Yāsīn al-Jazūlī（1059年没）を宗教指導者として招いたことから始まる⁽⁶⁾。イブン・ヤースィーンは自身に従った者たちにイスラーム法の遵守を求めただけでなく、周辺地域や部族の征服を指示した。彼に従った者たちはムラービトゥーン（murābiṭūn）⁽⁷⁾と呼ばれ、周辺の諸部族に対してジハードを唱え、各地を征服しはじめる（1039/40年頃-）。

この過程で、いずれもサンハージャ系のラムトゥーナ族、グダーラ族、マッスーフア族などが服従し、イブン・ヤースィーンへバイアを行った。例えばラムトゥーナ諸部族については以下のように記されている。

その後、彼（イブン・ヤースィーン）はラムトゥーナ諸部族の方へ向かい、彼らのもとにやってきて戦い、勝利した。彼らは服従し、悔い改め（tāba）、クルアーンとスンナの実行を条件に、彼にバイアを行った⁽⁸⁾。

その後、これらの諸部族はムラービトゥーンを構成する主要な部族となっていく。

他方で、イブン・ヤースィーンを招いたヤフヤー・ブン・イブラーヒームには、サンハージャ系諸部族における指導権（riyāsa）があったとされる⁽⁹⁾。これについては、当時、70ほどのサンハージャ系諸部族が同盟関係にあり、彼はその長の位にあったと考えられている（以下、本稿では彼とその後継者を「ベルベル諸部族の長」とする）。ただし、この時期はムラービトゥーンを構成する部族間の序列も、ベルベル諸部族の長の指導権も決定的なものではなかった。それらはイブン・ヤースィーンの意向によって決まり、当初は彼を招いたヤフヤー・ブン・イブラーヒームとその部族であるグダーラ族が中心的な役割を果たしたが、その後、イブン・ヤースィーンはヤフヤー・ブン・ウマル Yahyā b. ‘Umar（1056年没）率いるラムトゥーナ族と行動を共にするようになり、当該部族が他部族に対して優位に立つようになった⁽¹⁰⁾。ヤフヤー・ブン・ウマルが没すると、イブン・ヤースィーンは兄弟のアブー・バクル・ブン・ウマル Abū Bakr b. ‘Umar（1087年没）をその後継者に指名した。この際、ムラービトゥーンの諸部族に加えて、シジルマーサとダルアの人々がアブー・バクルにバイアを行った⁽¹¹⁾。興味深いことに、Bayānによると、この時イブン・ヤースィーンは、シジルマーサの民からアブー・バクルへのバイアを取りつけた。ベルベル諸部族の長に対してバイアが確認できるのはこれが最初である。既にバイアを受けているような権威者（イブン・ヤースィーン）が、アブー・バクルを指名し、彼へのバイアの仲介することで、新たなベルベル諸部族の長を知らしめ、他の部族に対し、アブー・バクルの優位と彼との主従関係を規定したのと考えられる⁽¹²⁾。イブン・ヤースィーンは絶対的な権力を保ちつつも、ベルベル諸部族の長の指名を行ったことで、その後、

ベルベル諸部族の長がムラービトゥーンの指導者となる足がかりを作ったといえる。

1-2. ベルベル諸部族における指導権

1059年に、敵対するバルガワータ族によってイブン・ヤースィーンが殺害されると、宗教的な後継者は現れず、ムラービトゥーンにおける指導権はベルベル諸部族の長であるアブー・バクルへと移った。その後もアブー・バクルは各地の遠征を指揮し、バルガワータ族やザナータ系部族、現在のフェスの周辺地域が支配下に入った⁽¹³⁾。

アブー・バクルの後に指導権を握る、従兄弟のユースフ・ブン・ターシュフィーン Yūsuf b. Tāshfin（位1061年頃-1106年⁽¹⁴⁾以下、ユースフ）については、アブー・バクルから段階的に権力が委譲されている。まず、アブー・バクルはユースフを軍の前衛（muqaddima）に据えた。その後、ユースフは次第に権力を強め、彼に従ったメクネスの支配者からバイアを得た。

この年（1063年）、メクネスの支配者（ṣāhib）であるマフディー・ブン・ユースフ al-Mahdī b. Yūsuf al-Jaznā'ī がユースフ・ブン・ターシュフィーンへバイアを行い、ムラービトゥーンに服従した。ユースフは、マフディーに彼の地域（‘amal）〔の支配〕を認め、マグリブの地とその諸部族との戦いのために、自軍を伴って参戦するよう命じた。そこでマフディーは軍を準備し、その軍を率い、ユースフ・ブン・ターシュフィーンを目指してアウサジャの町から出た⁽¹⁵⁾。

ここでは、ユースフへのバイアと引き換えにマフディーの支配権が承認され、その結果、軍事力の要求とその供出が行われている。

次に、アブー・バクルは1071年に南部のサハラ遠征に向かう際に、ユースフに軍の一部を託し、マグリブ支配の代理に指名した⁽¹⁶⁾。この後、ユースフは自身に従う者をさらに増やした。1072年に遠征から戻ったアブー・バクルは、このことを知ると、ユースフに権力を委譲し、自身はサハラに戻ることを決意し、二人はマラケシュ近

郊で会見を行った。*Bayān* は、この会見でアブー・バクルが自ら退位し、「証人（‘udūl）と諸部族の有力者（a‘yān）」がこれを証言したとする。他方で *Ḥulal* は、アブー・バクルが「ラムトゥーナ族の長たち（ashyākh），王朝の有力者，マスムーダ族の司令官（umarā’），書記，証人（shuhūd），貴顕（khāṣṣa），民衆（‘amma）」を臨席させたと述べ、いずれの史料も部族の有力者や族長らの前で権力が委譲されたことを明らかにしている⁽¹⁷⁾。二人は、何よりもまずベルベル諸部族からなる軍の指導者であり、ムラービトゥーンにおける権力は指揮下にある部族の軍事力と結びついていたため、彼らの了解を得る必要があったのであろう。

なお、この会見と権力の委譲（アブー・バクルの退位）について、*Bayān* は概要を再度記述した際に、アブー・バクルがユースフの指名と彼へのバイアを行ったとする。しかし、他の年代記では、バイアの話は用いられておらず、これらの著者は、バイアは行われなかった、あるいは両者の間にバイアによって示されるような主従関係が成立しなかったと捉えていたといえる。

1-3. アンダルス遠征と征服

ユースフ率いるムラービトゥーンはマグリブで勢力を拡大し続け、1070年頃に新都マラケシュを建設し、ここを拠点とした。こうした彼らの勢いは、アンダルスのターイファ諸国（Mulūk al-ṭawā’if）⁽¹⁸⁾の人びとに、ムラービトゥーン待望論をもたらした。当時、イベリア半島では、北方のキリスト教諸国が勢力を伸張しアンダルスへ進攻してきていたが、ターイファ諸国はこれに対抗する兵力を自ら調達できなかった。再三の救援要請を受け、ユースフは軍を率いて1086年にアンダルスに渡り、バダホス近郊のザッラーカ（スペイン語名サグラハス）での戦いでカステイーリャ＝レオン王アルフォンソ6世（レオン王位1065-1109年、カステイーリャ王位1072-1109年）の軍を撃破した。この際、一部の史料はアンダルスのターイファ諸王がユースフにバイアを行ったとする⁽¹⁹⁾。

ザッラーカの戦い後、ユースフはマグリブに戻ったが、その後も

アンダルスからの救援要請は続いた。1090年以降、ムラービト軍はアンダルス征服に乗り出し、グラナダを皮切りに、コルドバ、セビーリャと、各地を征服した。*Iḥāta*によると、このときグラナダの民(ahl al-madīna)がユースフにバイアを行った⁽²⁰⁾。グラナダ以外の状況は知られていないが、アンダルスでもマグリブと同様に、戦勝や征服時に当該地の代表や住民からバイアが行われていたのではないかと考えられる。

以上から、王朝草創期から初期のバイアは、ムラービトゥーンによる征服の際に、被征服地の住民や部族から、降伏や支配権の承認として行われた。これらは、マグリブに加え、アンダルスでも確認できる。また、ムラービトゥーンにおける権力は、宗教指導者イブン・ヤースィーンから、軍事力をもつベルベル諸部族の長であるアブー・バクルに渡り、ユースフへと移った。

なお、ユースフはアンダルス遠征に際し、同地の人々に、ジハードに参加し、自身へ「大衆のバイア (bay'at al-jumhūr)」を行うよう呼びかけたとされている⁽²¹⁾。ユースフは、自身に従う者に対して、軍事力の供出であるジハードへの参加とバイアによる服従を求めたことがここでも確認される。後代の歴史家イブン・ハルドゥーン(1406年没)は、『歴史序説』において、バイアを「服従を条件とする契約 (al-'ahd 'alā al-ṭā'a)」であり、「それはバイアを行った人が、自分自身のことやイスラーム教徒の民衆のことを管理取り締まる権限を、自己の主権者に委ね、どんな事柄についてもその主権者と争わず、また喜んでであれ無理強いであれ、彼の命令に従って自己に課せられた責任をまっとうするという条件のもとに、主権者と契約を結ぶことである」と説明している⁽²²⁾。ユースフが呼びかけたバイアはまさにこの一例といえる。

2 後継者指名と即位のバイア

2-1. ユースフによるアリーの後継者指名

ユースフは、治世の晩年、息子アリー 'Alī b. Yūsuf (位1106-1143年)を後継者(walī al-'ahd)に指名し、彼に対するバイアを取りつけ

た。これは、君主による息子の後継者指名と、それに伴いバイアが行われた最初の例であり、以後、この形が定着していくことから、ムラービト朝におけるバイアの儀礼の変化を考えるうえで画期的な事例だといえる。この後継者指名とバイアに関しては、多くの史料に記述があるが、著者によって内容に若干の相違がある⁽²³⁾。ラガルデール Lagardère を参考にしつつ、それらをまとめると、まずユースフはマラケシュで後継者指名を行い、アンダルスに渡った（1103年）。そして、グラナダに向かいアリーへバイアが行われたことを確認し、コルドバでアリーの後継者指名の儀礼を行った。Rawḍ には、ユースフはコルドバで息子アリーに対するバイアを取りつけ、「ラムトゥーナ族の司令官（‘umarā’）の全てと、その地域の顔役（ashyākh）⁽²⁴⁾や法学者」がアリーにバイアを行ったと記述され、アンダルスで初めて法学者がバイアの儀礼に参加したことがわかる。ユースフは、都のマラケシュだけでなく、アンダルスにおいても、息子アリーが後継者となったことを知らせ、人々の承認を直接確認したといえる。また、Bayān には、後継者指名のバイアが締結されたということに加え、書記のイブン・アルカシーラ Ibn al-Qaṣīra（1114/15年頃没）がその指名書（‘ahd）を作成したということも初めて記述される。この指名書については、本稿3-1で検討する。

2-2. アリーの即位と支配層や住民の対応

ユースフによって後継者指名とバイアを得たアリーは、1106年の父の死後、再びバイアを受けて即位した。Rawḍ はその様子を次のように伝える。

彼（アリー）の父ユースフが没したとき、彼は父を彼の衣で包み、兄タミーム Tamīm b. Yūsuf の手を取ってムラービトゥーンの前に出て行った。そして、彼らに彼（ユースフ）の死の宣言をした。するとタミームは自身の手をアリーの手に置き、彼にバイアを行った。それからムラービトゥーンに命じた、「立て。そしてムスリムたちの長（amīr al-muslimīn）⁽²⁵⁾〔であるアリー〕へバイアを行え」と。そこで同席したラムトゥーナ族、その他

のサンハージャ諸部族、法学者、族長たち (ashyākh qabā'il) の全てが彼にバイアを行い、マラケシュにおいて彼のバイアが行われた。それから彼はマグリブとアンダルスの各地、南の地域 of the 全てに、父の死と自身が後継者に指名されたことを知らせ、バイアを命じた書簡を送った。するとフェスを除く全ての地からバイアが彼のところへ届き、人びとが哀悼と祝賀のためにやって来た⁽²⁶⁾。

このように、アリーが即位したとき、族長や法学者らが直接対面でバイアを行うとともに、ユースフによる後継者指名の際と同様に、書簡でのバイアも行われた。しかし、引用の最後にあるように、彼の即位に対しては、フェスで、さらにはコルドバでバイア実行の拒否が起こった。

まず、フェスの司令官で、アリーの甥のヤフヤー・ブン・アビー・バクル Yaḥyā b. Abī Bakr b. Yūsuf (1106年以降没) は、すでにユースフによりフェスの司令官に任命されており、ユースフの死とアリー即位の知らせが届くと、アリーへのバイアを拒否した。これにはラムトゥーナ族の集団 (jamā'a) が同意していた。この報を受け、アリーが親征に出ると、これを知ったヤフヤーは逃走し、フェスを明け渡すこととなった。一説によると、ヤフヤーは既にバイアを行っていたトレムセンの地方官 ('āmil) マズダリー Mazdalī の仲介により、安全保障と引き換えにバイアを行ったという。その後、ヤフヤーはサハラに退去させられ、最終的にアンダルスのアルヘシーラスに追放された⁽²⁷⁾。

他方、コルドバでは、同地の司令官イブン・アルハーッジュ Muḥammad b. al-Ḥājj (1114/15年没) がアリーへの蜂起を企て、バイアの実行を遅らせた⁽²⁸⁾。このとき、コルドバの民の顔役 (mashyakha) や法学者からなる名士 (mala') がこれを支援した⁽²⁹⁾。その後、アリーはイブン・アルハーッジュを赦し、フェスとその周辺の総督 (wālī) に任命した。イブン・アルハーッジュは6ヶ月後にバレンシアの総督に任命され、最終的にアラゴン＝ナバーラ王アルフォンソ1世 (位1104-34年) との戦いで殉教した⁽³⁰⁾。以上の例から、アリー

は父の生前に後継者指名とバイアを受けていたとはいえ、その即位は自明ではなく、改めてバイアによる承認を得る必要があった⁽³¹⁾。

さらに、アリーは即位直後、アンダルスの状況を視察するため、同地に渡った。視察とともに、即位を自ら知らしめたと考えられる。このとき、アルヘシーラスで「アンダルスの裁判官、法学者、有力者 (zu‘amā’), 指導者 (ru‘asā’), 文人 (udabā’), 詩人」がアリーを出迎えた⁽³²⁾。これは君主を出迎える祝典と考えられ、バイアは行われていないが、アンダルスにおける在地住民の代表者たちが参加していたといえる。なかでも、法学者は先のアリーの後継者指名においてもバイアを行っていることから、ユースフ期にアンダルス各地のターイファ諸王が廃位されてからは、彼らが在地住民を代表する役割を担っていたといえる。また、マグリブでのバイアとアンダルス渡航後、それぞれにおいて、各地の総督の任免が行われた⁽³³⁾。バイアの実行拒否や遅延には支配者の出身部族や地域の名士が参加し、君主の懲罰的な遠征も行われ、バイアが形式的なものでなく、君主に対する服従や異議申し立てといった意思表示の場として実際に機能していたことがわかる。

2-3. アリーによる後継者指名とその後のバイアの継承

即位して20年ほど経た1128年、アリーは息子スィール Abū Muḥammad Sir を後継者に指名した。その経緯は、以下の通りである。まず、アリーが「信仰心と見解の確かな諸部族の代表たち (nuwwāb al-qabā’il)」を招集すると、彼らはスィールを選出するよう助言した。アリーはスィールへのバイアの書簡を作成するよう命じ、アンダルスの地方官 (‘āmil), 裁判官らにそれを送り、その結果、全ての軍事拠点 (qā’ida) でスィールへのバイアが締結された⁽³⁴⁾。このときアリーは、従兄弟や兄弟のタミーム、イブラーヒームを同席させていた。この後継者指名に関して、*Bayān* はイブン・アッサイラフィーやワッラークといった同時代の年代記作者の記述を伝えるが、当該箇所欠落があり、どの地でバイアが行われたのか明確でない。*Naẓm* はコルドバでバイアが締結されたとし、ウイスイ・

ミランダ Huici Miranda は、ヒジュラ暦522年ジュマダー第1月14日金曜日（1128年5月）に、アリーの息子でグラナダの総督、アブー・ハフス・ウマル Abū Ḥafṣ ‘Umar がスィールの後継者指名の儀礼を執り行ったとする⁽³⁵⁾。以上から考えると、この後継者指名とバイアも、コルドバとグラナダで行われ、近親や諸部族の代表による承認の後、各地でバイアが行われたといえることができる。また、アンダルスでは、地方官と同様に裁判官に書簡が送られており、法学者とならんで、社会的にも行政的にも、彼らの果たした役割が大きいことがうかがえる。このバイアの後も各地の総督の任免が行われた。

しかし、スィールは、即位前の1138年に子を遺すことなく死んでしまったため、アリーはアンダルスで戦功をあげていた息子のターシュフィーン Tāshufīn b. ‘Alī（位1143-45年）を新たな後継者として指名した⁽³⁶⁾。Bayān は、ターシュフィーンの後継者選出とその後のバイアの経緯を以下のように伝える。それは、スィールが没したとき、ムラービトゥーンの長たち（ashyākh）が新しい後継者の指名を望むと、アリーは「汝らが集まり、汝ら自身のために選び、汝らがそれに満足する者に合意せよ」と言った⁽³⁷⁾。そのため、貴顕（khāṣṣa）も民衆（‘amma）も、マラケシュの大モスクの水場に集まり、誰を選ぶかを相談すると、彼らの全てが、声を一つにして「ターシュフィーン、ターシュフィーン」と言った。そこでアリーは、ターシュフィーンを後継者に指名し、自身の名と共に彼の名を貨幣に打刻した。そして、ターシュフィーンは海岸地域（‘udwa）とアンダルス、マグリブの地に、彼へのバイアについて書簡を送り、人びとはターシュフィーンへバイアを行い、全ての地方から、ヒジュラ暦533年ラジャブ月（1139年3月）の日付の入ったバイアが届いたという。アリーは後継者の指名を自ら行わず、マラケシュの住民に委ねており、ムラービトゥーンの長が後継者を選出する手続きを主導している。ここでいうムラービトゥーンとは、ベルベル諸部族で構成されていると考えられるので⁽³⁸⁾、部族長が権力を保持するという王朝の初期からの構造が保たれていたことを示す。また、書簡によって

バイアを得る方法がここでも採られている。

アリーが1143年に没すると、上記のように後継者指名を受けていたターシュフィーンが即位し、バイアが行われた⁽³⁹⁾。彼もムワッヒド朝との戦いに出る前、息子イブラーヒーム Ibrāhīm b. Tāshufin (位1145年)を後継者として指名したとされるが、バイアの儀礼などの詳細は明らかでない。この戦いでターシュフィーンが没すると(1145年)、ラムトゥーナ族の全てがイブラーヒームへバイアを行ったが、叔父のイスハーク Ishāq b. ‘Alī (位1145-47年)が直ちにこのバイアを破棄した。イスハークへもバイアが行われたが、これによって両勢力に反目が起こり、この混乱状態のままムワッヒド朝によって1147年にマラケシュが陥落する⁽⁴⁰⁾。他方で、ムワッヒド運動の創始者イブン・トゥーマルトと、その後を継いだアブド・アルムウミンは、勢力を拡大し始める1120年代から支持者や征服した者たちからのバイアを得ており、彼らもまたバイアによる正当性の主張の伝統を継承したといえる⁽⁴¹⁾。

2-4. 小結

ユースフによるアリーの後継者指名以降、ムラービト朝のバイアは君主の即位時や後継者指名の際に特化する。これは、ムスリム居住地を征服する機会が減少したことに伴い、征服と同時に起こるバイアはなくなり、代わりに、即位や後継者指名といった機会に王権を承認する形に変化したことを意味する。対面儀礼の形のバイアは、首都マラケシュに加え、アンダルスのコルドバとグラナダでも行われた。これに加え、アリーの即位以降は、書簡を用いて広大な支配領域で一斉にバイアが行われるようになった。バイアの実行者としては、近親やラムトゥーナ族の司令官、部族の代表らが先に立ち、王朝は草創期の伝統を継いで諸部族の紐帯を重視し、それらを保持し続けた。また、法学者や裁判官も参与し、特にアンダルスでは、在地住民の代表としての役割を果たした。後継者指名や即位を契機として、君主のアンダルス渡航と同地の状況の調査、総督の任免も行われ、バイアは支配体制を固め直す機会を創出した。ムラービト

朝において、バイアは王朝草創期のような特定の権威ある宗教指導者亡き後の統一的な支配と、その正当化に実質的な役割を果たしたといえる。

また、バイアからムラービト朝の統治理念を知ることができる。ムラービト朝君主は、上述のように支配地域で住民にバイアを求める一方、アッバース朝カリフ権を尊重し、カリフにバイアを行い自らの支配地域の承認を求めた。セビーリヤの文人 (adīb) アブー・ムハンマド・ブン・アルアラビー Abū Muḥammad b. al-‘Arabī (1099年没) が、カリフ・ムスタズヒル al-Mustazhir (位1094-1118年) に宛てて作成した書簡には、ユースフがカリフにバイアを行い、その宗主権下でマグリブとアンダルスを統治することについて許可を求めたことが示されている⁽⁴²⁾。ムラービト朝君主は、カリフを頂点とするイスラーム共同体の政治秩序の中に自らを位置づけることで、広大な領域の支配における正当性の強化を試みたのである⁽⁴³⁾。

3 ムラービト朝におけるバイアの手続きと主張

本章では、書簡集や文書集 (文例としての雛形を含む) の記述から、王朝におけるバイアの手続きを再構成するとともに、王朝の主張を検討する。他のイスラーム王朝と同様に、ムラービト朝の書簡・公文書は、書記 (kātib) によって作成され、君主や軍司令官などの名において出された。ムラービト朝下で活躍し、司法行政に重用された法学者の多くがアンダルス出身者であったのと同様に、登用された書記の多くもアンダルス出身者であった。とりわけ、イブン・アルカシーラ、イブン・アビー・アルヒサール Ibn Abī al-Khiṣāl (1142年頃没)、イブン・アティーヤ Ibn ‘Aṭīya (1158年没) などが著名である⁽⁴⁴⁾。

3-1. 後継者の指名書

既に検討したように、ユースフによる息子アリーの後継者指名とその際のバイア (本稿2-1, 以下同様) は、王朝の歴史を通じて最も重要なバイアの一つであり、複数の指名書 (‘ahd) が諸史料に引用

され伝わっている。*Ḥulal* には、宰相 (wazīr) で法学者のイブン・アブド・アルガフル Ibn ‘Abd al-Ghafūr によって、ヒジュラ暦495年 (1101/02年) にマラケシュにおいて書かれたものが引用されている⁽⁴⁵⁾。他方で、書記イブン・アルカシーラによって、ヒジュラ暦496年ズー・アルヒッジャ月 (1103年9月) にコルドバにおいて書かれたものも存在し、これは先述の *Bayān* の記述に一致する⁽⁴⁶⁾。総合すると、まずマラケシュで後継者指名が行われ、イブン・アブド・アルガフルによって指名書が作成され、その後、アンダルスでも後継者指名とパイアが行われた際に、イブン・アルカシーラによって後継者の指名書が作成されたといえる。特に、イブン・アルカシーラのものはマムルーク朝 (1250-1517年) のカルカシャンディー al-Qalqashandī (1418年没) による著名な文書行政の手引き書 *Ṣubḥ* に「王 (malik) の後継者の指名書」の諸書式のうちの一つとして収録され、後代の模範とされた可能性が高く、またその文面がパイアの儀礼の様子を伝えているので、本節ではこれを検討する⁽⁴⁷⁾。全体の長さは、440語程度である。

まず書き出しで、これがユースフからアリーへの任命の書簡 (kitāb tawliya) であり委任 (tawṣiya) の書簡であることが記される。続いて、ユースフとアリーへの賞讃とともに、アリーの選出理由と経緯が述べられる。後継者には、他に候補者がいたことを示唆するが、ユースフが相応しい者に助言を求めたところ、彼らの意見はアリーで一致した。そこでユースフはアリーを指名し、臣民と国家の重要事を委ね、可能な限り神を畏れ、公正さとクルアーンとスナナの裁定から逸脱しないことを課した。それから、ユースフはアリーへのパイアを呼びかけ、その場にいた者や近くにいた者が誓いの握手を差し出し、パイアを行った。さらに、ユースフはこの後継者指名によって、人びとから不安が消え、喜びが起こるように、その地の残りの人々へパイア実行の宣言 (mukhāṭaba) を命じた。そして「神が、『満足の誓い (bay‘at Riḍwān)』⁽⁴⁸⁾において、優勢の握手 (ṣafqat ruḡhān) において、幸運と平和の呼びかけにおいて、彼ら (人びと) を祝福しますように」という祈願がなされる。最後に、これまでの内容に

ついてユースフに対して証言がなされたこと、バイアを課された者は皆、アリーの代わりにユースフと会見し⁽⁴⁹⁾、服従して自発的に握手をしたこと、書簡がコルドバで作成されたことが記される。

この後継者の指名書では、ユースフによるアリーの後継者指名とバイアが行われた経緯が示されている。後継者指名については、アリーが優れているというだけでなく、熟考や諮問を経てしかるべき手順で後継者の選出と指名がなされたことを述べ、その正当性を主張している。

3-2. バイア実行の書簡

次の書簡は雛形であり、具体的な差出人、宛名、日付等は記されていない⁽⁵⁰⁾。この書簡は複数の書記による書簡集に収められており、書簡集の編者によって、書記イブン・アビー・アルヒサルが作成したもので、バイア実行 (mubāya'a) について作成された中で最も素晴らしいもののひとつと書かれている。校訂者は、解題の中で、君主アリーの息子スィールに対する後継者指名の際のバイア (1128年、2-3.) でないかと推測するが、既に述べた通りアリーは後継者指名を何度か行っているため、後継者の確定はできない。この書簡は全体で640語程度と少々長く、内容も難解なものである。

書簡はまず、神への感謝にはじまり、預言者ムハンマド、正統カリフへの祈願文が続く。ここで、預言者は『『満足の誓い』を慣行とし、誓いの握手 (ṣafqāt al-aymān) を与え、服従の必然性に従って契約を結び、集団の分裂に警告を発した』者とし、正統カリフは「宗教において相違を絶ち、自らに後継者指名の義務を負った。そして、それによって、生前もしたように死後もムスリムを助けようと考えた」者たちとする。後継者指名の契機は、父王が最期を悟り、預言者がアブー・バクルを指名した伝承に注意を払って後継者の指名を決意したとし、本来であれば後継者の位置にいない者だが、その者が民のことを考えているために選出したとする。その後、服従の契約 ('aqd-hu al-muṭā') が、ある地域の地方官「某」と同地のムスリム全てに届き、この地方官は誓約を行い、同地の全ての人へバイ

アを呼びかけた。そして全てのムスリムは急いでバイアに向かった。この吉報が広がったとき、人びとは急いで誓いの握手を差し出し、聞き従い、能力の限りを尽くすことを条件に、また「後継者を承認した者に属する者は党派 (ḥizb) [を組む仲間] に、彼を承認しなかった者に属する者は戦い (ḥarb) [の相手] となるという条件で」バイアをした。そして最後に、日付とともに「某家の名士 (al-mala' min banī fulān) と、彼らに従う者が、その名前を本書簡に書き記した。」とする。

本書簡では、父王がバイアを求めた契約 ('aqd) が届き、人びとがバイアを行ったと記され、具体的な名前を入れ、経緯を示すように書かれている。また、署名に関する文章が続くことから、バイアを行った者が署名して送る、バイア実行の書簡の雛形だと考えることができる。その手続きは、地方官がバイアを行い、住民へとバイアを呼びかけ、住民が一定の集団ごとにバイアの署名を行うというものだったといえる。また、この後継者の選出は、後継者の位置にいない者を選んだという表現から、既定事実ではなかったことを示す。預言者ムハンマドや正統カリフを形容する表現の中で、間接的に後継者指名を巡る王朝内部の分裂や意見の相違があったことを示唆するが、これがアリーによる後継者指名の書簡だとすると、当時の状況と符合する。ここでも預言者や正統カリフ期の伝統を記し、後継者の選出とバイアの手続きを正当化しているが、これはバイアの実行者（地方官および住民）が送るものなので、彼らがこれらの正当化を行っていることになる。

3-3. バイア実行に対する返答

最後は、バイア実行の書簡 (kitāb al-bay'a) に対する、君主からの返答の書簡である⁽⁵¹⁾。この返答も雛形であり、具体的な日付はないが、書記イブン・アルカシーラが作成し、差出人はアリーで、差出地はマラケシュとされる。校訂者は、解題でアリー即位直後の1106年頃のものであるとする。全体の長さは120語ほどしかなく、前述の2通に比べると非常に簡潔かつ実務的な筆致である。以下に、

本文にあたる部分を引用する。

あなた方の高貴な書簡が到着し、我々はその意味するところを読み、その中にあるあなた方の言葉の摘要と委細における意味を理解した—我々は、これまでのあなた方の我々に対する専心と希望を承知し、あなた方を気にかけ、あなた方に好意をもってこの書簡のことを十全に実行する者である—、このとき、我々はあなた方の望みをなおざりにせず、あなた方の力を強めることやあなた方を欺く者の力を弱めることに対して無関心ではないであろう。もし力強く偉大なるアッラーが望むならば。神こそは、あなた方の状況の支配者であり、それを正し、またあなた方の行い〔の支配者〕であり、それに成功を与える御方である。アッラーの他に神はなし。すでに、我々はあなた方に証書(ṣakk)を発行した。それは、この我々の回答とともにあなた方に届き、あなた方は自らのバイアの書簡(kitāb bay‘at-kum)に記されていることについて責任を負い、あなた方について証書から矛盾することはなく、諸事の小さいことも大きいことも〔人びとが〕その道から外れることのない、証書である。まことに神は、あなた方の援護者、恩恵と幸運によってあなた方の側を守り、証書に関するあなた方の言い訳を、いともたやすくやめさせる御方である。平安あれ。

内容から、バイアを実行した住民の書簡に対する、君主の返答の書簡と考えられる。これとともに証書が送られ(計2通)、バイアの書簡を確かに受け取ったことを示す⁽⁵²⁾。ここでいうバイアの書簡とは、おそらく前節3-2.に相当する、バイアを実行したことを示す書簡であろう。

以上を整理すると、ムラービト朝における後継者指名の際のバイアについては、まず対面儀礼が執り行われ、後継者の指名書が作成された(3-1.)。君主の即位のバイアに関して、何らかの文書が作成されたかは不明である。この後、バイアを求めた書簡を受け取った地方官や住民はバイア実行の書簡を作成・署名してこれを返送し(3-2.)、最後に君主がそれに証書を加えた形で受領確認の書簡を送っ

た(3-3.)、という一連の流れが明らかになる。これは年代記における、対面によるバイアの儀礼の後、バイアを命じた書簡を送り、そして全ての地方からバイアが届いた、といった記述(2-2、2-3.)に一致し、これらがムラービト朝におけるバイアの定型的な手続きであったといえる。このように、書簡を用いることで、バイアの実行者も貴顕から支配地の全域へと広がった。書簡には、預言者や正統カリフの先例、および王権を正当化する修辞法を盛り込み、自らが正当な支配者であることを効果的に周知し、また住民からもそれに対する承認を取りつけ、服従の契約を結んでいたといえる。

お わ り に

ムラービト朝における通時的なバイアの検討からは、バイアの参加者および手続きの変化が認められる。そこでは、近親やラムトゥーナ族の司令官、部族の代表による承認が先立ち、王朝の権力構造の核は、ベルベルの部族集団の紐帯によって形成されるという、草創期からの伝統を保持し続けたことを示している。他方で、法学者や裁判官の存在も顕著になるが、これは、アンダルスの法学者や書記の重用と無関係ではないだろう。支配領域の拡大とともに、直接対面の儀礼に加え書簡によってバイアを得ることで、バイアの実行者も広がり、支配地の全域と服従の契約を結んでいた。

忠誠の誓いとしてのバイアは、マグリブ・アンダルスにおいても、8世紀末から実施が確認できる。サハラ砂漠西部のサンハージャ系ベルベルによるムラービト朝では、こうしたバイアの伝統を採用しプロトタイプに従って行いつつ、王権の正当性を主張し住民の服従を確認する実質的な機会として利用していた。マグリブ・アンダルスの統一的な支配と書簡をも用いた全国的なバイアの実施は、マグリブ地域にバイアの定式化と定着をもたらし、結果として、今日のアラウィー朝(1664・68年-)に至るまで、連綿と継承される儀礼となった。なお、本稿では、ムラービト朝のバイアに特有の用語や法学理論との関係については論じることができなかった。続くムワッヒド朝では、バイアの用例や書簡は豊富に残っているため、これら

との比較を通じて、両王朝の支配の変化や特徴が明らかになると考える。それらは今後の課題としたい。

主要史料および略号一覧（著者名順）

Ḥulal: Anonymous, *Kitāb al-ḥulal al-mawshīya fī dhikr al-akhbār al-marrākushiya*, ed. by Suhayl Zakkār and ‘Abd al-Qādir Zamāma, Casablanca, 1979.

Masālik: al-Bakrī, Abū ‘Ubayd ‘Abd Allāh, *al-Masālik wa-l-mamālik*, ed. by Jamāl Ṭaliba, 2 vols., Beirut, 2003.

Ḥulla: Ibn al-Abbār, *Kitāb al-ḥulla al-siyarā’*, ed. by Ḥusayn Mu’nis, 2 vols., Cairo, 1985.

Mu’jam: Ibn al-Abbār, *al-Mu’jam fī aṣḥāb al-qāḍī al-imām Abī ‘Alī al-Ṣadaḡī*, ed. by Bashshār ‘Awwād Ma’rūf, Tunis, 2011.

Rawḡ: Ibn Abi Zar’, *al-Anīs al-muṭrib bi-rawḡ al-qirṭās fī akhbār mulūk al-Maghrib wa-ta’rīkh madīnat Fās*, ed. by ‘Abd al-Wahhāb b. Maṣṣūr, Rabat, 1999.

Shawāhid al-jilla: Ibn al-‘Arabī, Abū Bakr, *Kitāb shawāhid al-jilla wa-l-a’yān fī mashāhid al-Islām wa-l-buldān*, in Muḥammad Ya’lā (ed.), *Tres textos árabes sobre beréberes en el occidente islámico*, Madrid, 1996, pp. 273-383.

Bayān: Ibn ‘Idhārī al-Marrākushī, *al-Bayān al-mughrib fī akhbār al-Andalus wa-l-Maghrib*, ed. by Iḥsān ‘Abbās et al., 4 vols., Beirut, 1983.

Iktifā’: Ibn al-Kardabūs, *Iktifā’ fī akhbār al-khulafā’*, ed. by ‘Abd al-Qādir Būbāya, 2 vols., Beirut, 2009.

Muqaddima: Ibn Khaldūn, *al-Muqaddima*, ed. by ‘Abd al-Salām al-Shaddādī, Casablanca, 3 vols., 2005; 森本公誠訳『歴史序説』全4巻, 岩波書店, 2001.

A’māl: Ibn al-Khaṭīb, *A’māl al-a’lām fī-man būyi’a qabla al-iḥṭilām min mulūk al-Islām wa-mā yata’allaqu bi-dhālika min al-kalām*, ed. by Sayyid Kasrūwī Ḥasan, 2 vols. in 1, Beirut, 2003.

Iḥāṭa: Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥāṭa fī akhbār Garnāṭa*, ed. by Yūsuf ‘Alī Ṭawīl, 4 vols., Beirut, 2003.

- Jadhwa*: Ibn al-Qāḍī al-Miknāsī, *Jadhwat al-iqtibās fī dhikr man ḥalla min al-a'lām madīnat Fās*, 2 vols., Rabat, 1973-1974.
- Naẓm*: Ibn al-Qaṭṭān al-Marrākushī, *Naẓm al-jumān li-tartīb mā salaḥa min akhbār al-zamān*, ed. by Maḥmūd 'Alī Makkī, Tunis, 2011.
- Tartīb*: 'Iyāḍ b. Mūsā, Abū al-Faḍl, *Tartīb al-madārik wa taqrīb al-masālik li-ma'rifat al'lām madhhab Mālik*, ed. by Sa'id Aḥmad A'rāb et al., 8 vols., Rabat, 1983.
- Ṣubḥ*: al-Qalqashandī, *Ṣubḥ al-a'shā fī ṣinā'at al-inshā'*, 16 vols., Cairo, 1972-1983.
- Rasā'il*: *Rasā'il andalusīya jadīda ('aṣr al-murābiṭīn)*, ed. by Ḥayā Qārra, Chefchaouen, 1994.
- Wathā'iq*: *Wathā'iq ta'rīkhīya jadīda 'an 'aṣr al-murābiṭīn*, ed. by Maḥmūd 'Alī Makkī, Cairo, 2004.

註

- (1) ムラービト朝の概説は以下の通り。Jacinto Bosch Vilá, *Los Almorávides. Estudio preliminar por Emilio Molina López*, Granada, 1990; Vincent Lagardère, *Les Almoravides: Jusqu'au règne de Yūsuf b. Tāšfin (1039-1106)*, Paris, 1989; id., *Les Almoravides: Le djihād andalou (1106-1143)*, Paris, 1998; María Jesús Viguera Molíns et al., *Historia de España / fundada por Ramón Menéndez Pidal*, t. VIII-II, Madrid, 1997. この地域の宗教状況やムラービト運動については、荻谷康太『イスラームの宗教的・知的連関網：アラビア語著作から読み解く西アフリカ』東京大学出版会，2012，pp. 38-50; 私市正年『北アフリカ・イスラーム主義運動の歴史』白水社，2004，pp. 19-48.
- (2) *Encyclopaedia of Islam* (以下，*El*⁹), BAY'A (by E. Tyan); *Ma'lamat al-Maghrib*, VI, bay'a (by I. Ḥarakāt), pp. 1957-1958. 政治理論におけるパイアについては，以下を参照。アル＝マーワルディー（湯川武訳）『統治の諸規則』慶應義塾大学出版会，2006，pp. 5-43; *Muqaddima*, I, pp. 356-357. cf. Eric J. Hanne, "Ritual and Reality: The Bay'a Process in Eleventh- and Twelfth-Century Islamic Courts", in Alexander Beihammer et al. (eds.), *Court Ceremonies and Rituals of Power in Byzantium and the Medieval Mediterranean*,

Leiden, 2013, pp. 141-143.

- (3) 同時期の西アジアについては、ハンネ Hanne が、アッバース朝カリフに対するバイアの儀礼やその性質、歴史叙述への影響を論じている。Hanne, “Ritual and Reality”, pp. 141-157.
- (4) これまで、王朝の支配の正当化については、その宗主権を認めたアッバース朝（750-1258年）との関係や王朝の血統などから議論がされてきた。Helena de Felipe, “Berber Leadership and Genealogical Legitimacy: The Almoravid Case”, in Sarah Bowen Savant and Helena de Felipe (eds.), *Genealogy and Knowledge in Muslim Societies: Understanding the Past*, Edinburgh, 2014, pp. 55-70; Maribel Fierro, “Entre el Magreb y al-Andalus: La autoridad política y religiosa en época almorávide”, in Flocel Sabaté (ed.), *Balaguer, 1105. Cruïlla de civilitzacions*, Lleida, 2007, pp. 99-120; Évariste Lévi-Provençal, “Le titre souverain des Almoravides et sa légitimation par le califat ‘abbāside”, *Arabica* 2, 1955, pp. 265-280.
- (5) 書名は以下の通り。Ibn al-Ṣayrafī, *Kitāb al-anwār al-jalīya fī akhbār al-dawla al-murābiṭīya*; ‘Abd al-Malik b. Mūsā al-Warrāq, *Kitāb al-muqtabis fī akhbār al-Maghrib wa-l-Andalus wa Fās*.
- (6) *Ḥulal*, pp. 19-20; *Masālik*, II, pp. 351-352; *Bayān*, IV, pp. 7-8; Bosch Vilá, *Los Almorāvides*, pp. 49-51; Lagardère, *Les Almoravides* (1039-1106), pp. 45-46.
- (7) ムラービトゥーンとは、リバート (ribāṭ 修道所) に集う者たちという意味で、王朝の名はこの語に由来するが、ムラービトおよびリバートの語の解釈については諸説がある。Eṭ, RIBĀṬ (by J. Chabbi and N. Rabbat) ; AL-MURĀBIṬŪN (by H. T. Norris and Chalmeta).
- (8) *Rawḍ*, p. 159. 1056/57年頃にもイブン・ヤースィーンへバイアが行われた (*Rawḍ*, p. 163)。
- (9) *Rawḍ*, p. 154; *A’māl*, II, p. 385. また、これらの史料では、彼を長 (amīr) とも記す。他方で、*Ḥulal*, *Bayān* では彼を「グダーラ族の一人」とする (*Ḥulal*, p. 19; *Bayān*, IV, p. 7)。
- (10) *Ḥulal*, p. 21; *Rawḍ*, p. 160; *Bayān*, IV, pp. 8-11. cf. 荻谷『イスラームの宗教的・知的連関網』, p. 47. なお、ヤフヤー・ブン・ウマルに対して

- は、全ての史料が長 (amir) と記す。
- (11) *Ḥulal*, p. 23; *Rawḍ*, pp. 162, 169; *Bayān*, IV, pp. 14-15.
- (12) こうしたことから、多くの史料がイブン・ヤースィーンを「命令と禁止を指示する事実上の司令官 (amir)」であったとする (*Ḥulal*, p. 21; *Rawḍ*, p. 160; *Bayān*, IV, p. 12)。
- (13) *Rawḍ*, p. 169.
- (14) ただし、ユースフの在位期間については、アブー・バクルがサハラに去った72年頃に始まるという説もある。EF, YŪSUF B. TĀSHUFĪN (by H. Ferhat); Lagardère, *Les Almoravides* (1039-1106), pp. 79-84.
- (15) *Rawḍ*, p. 177. cf. *A'māl*, II, p. 388. 1071/72年にも諸部族がバイアを行った (*Rawḍ*, p. 179)。
- (16) *Ḥulal*, pp. 24-25; *Rawḍ*, pp. 162, 170, 175; *A'māl*, II, p. 387; *Bayān*, IV, pp. 18-21. 最初の任命の年を *Rawḍ* は1056年とし、*Bayān* は1068/69年とする。託した軍は、*Ḥulal*, *Bayān* が全体の三分の一、*Rawḍ* が半分とする。
- (17) *Ḥulal*, pp. 26-27, *Bayān*, IV, pp. 24-25. cf. *Rawḍ*, pp. 171-172; *A'māl*, II, pp. 387-388; *Iḥāṭa*, IV, pp. 302-303; Lagardère, *Les Almoravides* (1039-1106), pp. 82-84. *A'māl* では、アブー・バクルが去った後、ユースフはサンハージャ諸部族からのバイアを更新した。
- (18) ターイファ諸国とは、当時、アンダルス各地に乱立していた国々のこと (1031-1090年)。cf. David Wasserstein, *The Rise and Fall of the Party-Kings: Politics and Society in Islamic Spain 1002-1086*, Princeton, 1985.
- (19) *Rawḍ*, p. 174.
- (20) *Iḥāṭa*, III, p. 290. ただし、グラナダ征服の方法については諸説がある (Yūsuf Ashbākh, *Ta'rikh al-Andalus fī 'ahd al-murābiṭīn wa-l-muwahḥidīn*, trad. Muḥammad 'Abd Allāh 'Inān, Cairo, I, 1939 (repr. 2011), p. 98)。
- (21) *Shawāhid al-jilla*, p.301; trans. by María Jesús Viguera Molíns, “Las cartas de al-Gazālī y al-Ṭurṭūṣī al soberano almorávid Yūsuf b. Tāshfīn”, *Al-Andalus* 42, 1977, pp. 351-353; De Felipe, “Berber Leadership”, p. 58. ここでいう bay'at al-jumhūr は、bay'at al-'amma と同義か。
- (22) *Muqaddima*, I, p. 356 (森本訳『歴史序説 (二)』p.51). 森本訳は一部改めた。

- (23) *Ḥulal*, pp. 78-80; *Ḥulla*, II, pp. 248-249; *Rawḍ*, p. 197; *Bayān*, IV, pp. 42-44; *Iktifāʾ*, I, p. 422. cf. Bosch Vilá, *Los Almorávides*, p. 165; Lagardère, *Les Almoravides* (1039-1106), pp. 146-147. *Bayān*の記述には欠落があるものの、グラナダとコルドバでバイアが行われたと推論される。
- (24) 史料中には、たびたびシャイフ (shaykh) という語が出てくる。多くの場合、ベルベルの部族と結びついており、その場合本稿では「族長」と訳した。当該部分では、アンダルスの都市 (コルドバ) と結びついており、族長でなく都市の「顔役」とした。
- (25) ムラービト朝君主は、ユースフ以降この称号を採用した。
- (26) *Rawḍ*, p. 199. *Bayān* においてもバイアの儀礼が記述されるが、臨席者は、諸部族の有力者 (zuʾamāʾ), 長たち (ruʾasāʾ) とされ、法学者は書かれていない (*Bayān*, IV, p. 48)。また、*Ḥulal* は、兄のタミームがバイアを行ったとする (*Ḥulal*, p. 84)。
- (27) *Rawḍ*, pp. 199-201; *Jadhwa*, II, p. 460. cf. Francisco Codera y Zaidín, “Familia real de los Benitexufin”, in id., *Estudios críticos de historia árabe española: Segunda serie*, Valladolid, 2005 (ed. facsím.), pp. 94-99; Lagardère, *Les Almoravides (1106-1143)*, pp. 14-17.
- (28) *Muʾjam*, pp. 175, 190. cf. Lagardère, *Les Almoravides (1106-1143)*, pp. 14-15.
- (29) ただし、当時コルドバの裁判官だったイブン・ハムディーーン Muḥammad b. ʿAlī b. Ḥamdīn (1114年没。在任期間1097-1114年) はアリーを支持したという。Maribel Fierro, “The Qāḍī as Ruler” in *Saber religioso y poder político en el Islam. Actas del Simposio Internacional (Granada, 15-18 octubre 1991)*, Madrid, 1994, pp. 89-90.
- (30) *Bayān*, IV, pp. 48-49, 53-54; *Jadhwa*, II, p. 460.
- (31) アリーはユースフの子の中で最年少であり、母はキリスト教徒だったが、他の異母兄弟を抑えて後継者に選ばれた (*Ḥulal*, p. 77; *Rawḍ*, p. 198.)。
- (32) *Ḥulal*, p. 85; *Bayān*, IV, p. 48.
- (33) *Rawḍ*, p. 201; *Bayān*, IV, pp. 48-49, *Jadhwa*, II, p. 460. なお、プワイフ朝では、君主の就任の際、軍はバイアの見返りに相当の手当 (rasm al-

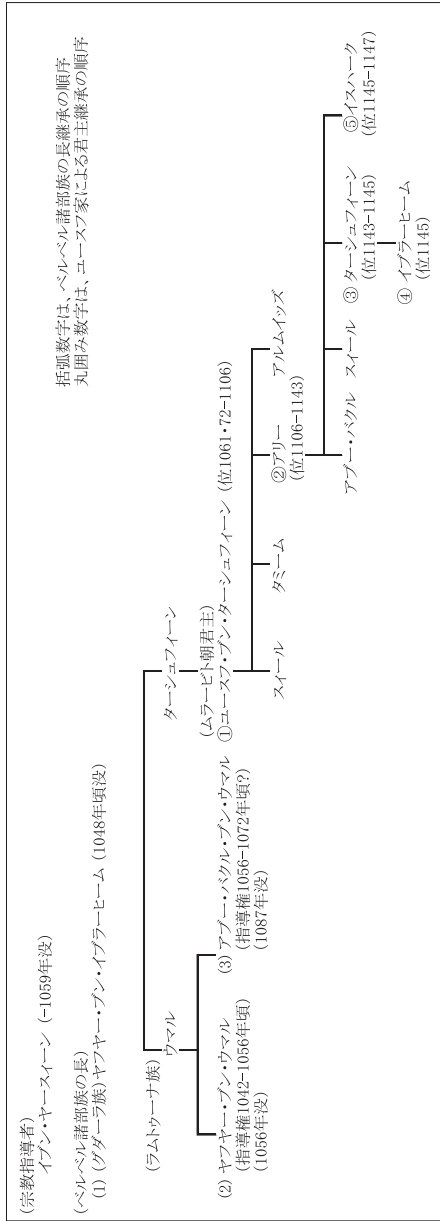
- bay'a) を要求するのが慣例となっていた。これはアッバース朝カリフの就任にも該当する。Roy Mottahedeh, *Loyalty and Leadership in an Early Islamic Society*, Princeton, 1980 (repr. 2001), pp. 50-54; 清水宏祐「ブワイフ朝の軍隊」『史学雑誌』81-3, 1972, p. 79. cf. Hanne, “Ritual and Reality”, pp. 148-149, 153.
- (34) *Bayān*, IV, p. 78.
- (35) *Naẓm*, p. 148; Ambrosio Huici Miranda, “‘‘Ali b. Yūsuf y sus empresas en el Andalus’’, *Tamuda* 13-14, 1959, p. 112. cf. Lagardère, *Les Almoravides (1106-1143)*, pp. 143-146.
- (36) *Bayān*, IV, pp. 78-80, 97-98. cf. *Ḥulal*, p. 120; *Rawḍ*, p. 208; *Iḥāṭa*, I, pp. 247-249.
- (37) この背景には、スィールの母カマル Qamar がターシュフィーンを妬んでおり、イスハークの実母の没後に、彼を自身の子のように育てていたため、その指名を望んだという事情があるとされる (*Bayān*, IV, p. 97)。
- (38) 同時代のセビーリヤで書かれたヒスバの書 (*Ḥisba* 市場監督官の手引き書) では、ムラービトゥーンとしてベルベル諸部族が挙げられている。Ibn ‘Abdūn al-Tujībī, *Risāla fī al-qaḍā’ wa-l-ḥisba*, ed. Mustafā al-Ṣamdī, Beirut, 2009, pp. 77-79 (Trans. by Lévi-Provençal, *Séville musulmane au début du XII^e siècle: Le traité d’Ibn ‘Abdun sur la vie urbaine et les corps de métiers*, Paris, 2001, pp.61-63).
- (39) *Bayān*, IV, p. 101; *Jadhwa*, I, p. 170.
- (40) *Ḥulal*, p. 135; *Bayān*, IV, p. 105; *A‘māl*, II, p. 397.
- (41) *Ḥulal*, pp. 103, 107-109, 130, 143; *Rawḍ*, pp. 220, 225-229, 236-241; *Bayān*, IV, pp. 68-69; etc. イブン・トゥーマルト Ibn Tūmart (1130年没) はタウヒード (tawḥīd 神の唯一性) 思想を奉じて反ムラービト朝運動を展開し、後継者アブド・アルムウミン ‘Abd al-Mu‘min (1163年没) がムワッヒド朝 (1130-1269年) を創始した。ET, AL-MUWAḤḤIDŪN (by M. Shatzmiller).
- (42) *Shawāhid al-jilla*, pp. 279-290; Lévi-Provençal, “Le titre souverain des Almoravides”, pp. 265-280. cf. *Muqaddima*, I, p. 386.
- (43) ハンネによると、ブワイフ朝やセルジューク朝の君主がカリフへ忠

誠を誓う場合、バイアの語が用いられるが、これらの君主に対する臣従については「ヒルフ (ḥilf)」という語の方が多く用いられるという。Hanne, “Ritual and Reality”, pp. 156-157.

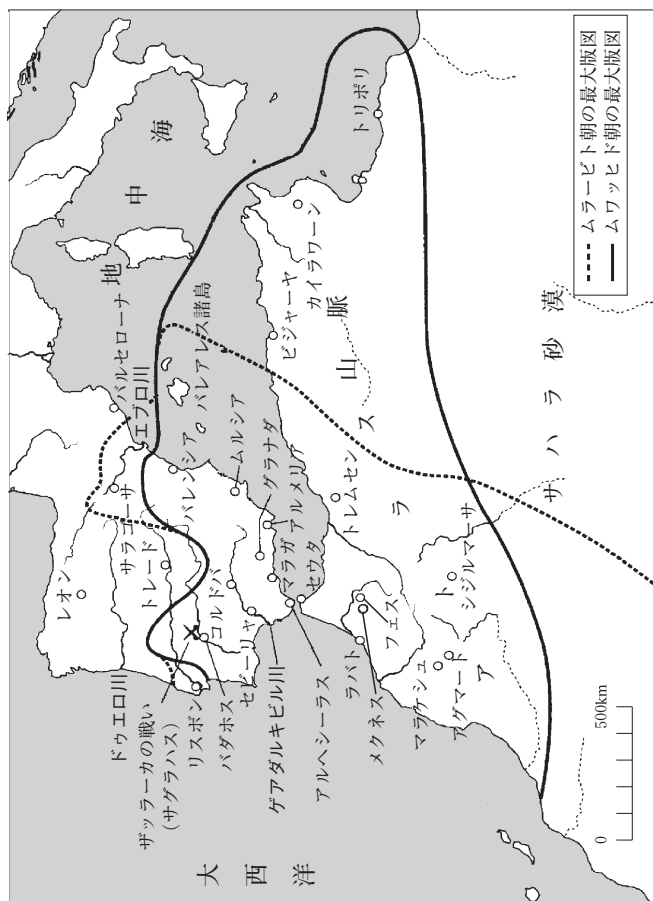
- (44) Lagardère, *Les Almoravides (1106-1143)*, pp. 245-298.
- (45) *Ḥulal*, pp. 78-80.
- (46) *Rawḍ*, pp. 558-560; *Iḥāṭa*, II, pp. 369-370; *Ṣubḥ*, X, pp. 160-162; Lagardère, *Les Almoravides (1106-1143)*, pp. 263, 295. 本稿で用いたのは *Rawḍ* の巻末補遺である。*Rawḍ* では出典不明として収録されているが、*Iḥāṭa*, *Ṣubḥ* よりイブン・アルカシーラによるものだとわかる。
- (47) なお、*Ḥulal* の校訂者は、イブン・アブド・アルガフルのもののが第一の指名書であり、イブン・アルカシーラのもはその確認 (ta'kid) であろうと述べている (*Ḥulal*, p. 79)。
- (48) 「満足の誓い」とは、628年のフダイビヤの和約の前に、預言者ムハンマドがクライシュ族と戦う際に忠誠を誓わせたことを指すとみられる。cf. 『クルアーン』48: 10, 18; イブン・イスハーク著、イブン・ヒシャーム編註 (後藤明他訳) 『預言者ムハンマド伝』3, 岩波書店, 2011, pp. 131-132, 609. この誓いは「婦人の誓い」とともにバイアの原型とされる (*EF*, BAY'A)。
- (49) 当該部と年代記の記述から、このときアリーは不在だった (*Rawḍ*, p. 197)。
- (50) *Rasā'il*, pp. 28-33. 解題は *Rasā'il*, pp. 12-13.
- (51) *Wathā'iq*, p. 70 (no.10). 解題は *Wathā'iq*, p. 41.
- (52) *Naẓm* は、イブン・トゥーマルトの証書 (ṣakk) の例を以下のように伝える。最初に神と預言者ムハンマドへの祈願文があり、「我は言う、我は、ムハンマド・ブン・アブド・アッラーフ・トゥーマルト Muḥammad b. 'Abd Allāh Tūmart, 最後の救世主 (mahdī) である」と続き、日付がくる (*Naẓm*, p. 89)。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科・博士後期課程)

図表 1 ベルベル諸部族の長とムラービト朝君主系図



図表2 ムラービト朝の版図



関哲行他編『世界歴史体系スベイン史1—古代～近世—』山川出版社, 2008, p.107より一部加筆修正。